2020 年 9 月

# 今月の新着図書から

# 中地義和編『対訳ランボー詩集：フランス詩人選（1)』

# （岩波文庫，2020 年）

高等科図書主任
林　知宏

アルチュール・ランボー（1854-1891）は，10 代の後半に詩作を重ね，20 歳を過ぎてからは創作を実質的に停止してしまう．そのわずかな期間に残した珠玉の作品を通じて世に知られる，まさに早熟の天才と呼ぶにふさわしい人物である．40 年の時間的ずれがあるが，私はガロア理論を創出し，20 歳 10 か月で決闘に散った同じフランスの数学者エヴァリスト・ガロア（1811-1832）を想起してしまう．神様が特定に人物に舞い降りて，何かを授けて，あっという間に去っていくという出来事がここにも起きていたのだ．

日本では多くの人々がこのランボーの言葉に魅せられてきた．小林秀雄，中原中也，堀口大學，金子光晴以来，多くの訳者たちによるランボー詩集が刊行されている．私自身は今まで宇佐美斉訳（ちくま文庫）に親しんできた．また，平井・湯浅・中地・川那部訳による『ランボー全集』（青土社）も購入して，膨大な解題と註から多大な情報を得た．

今回の新訳は，特に左側のページにフランス語の原文が，そして右側のページに日本語訳が掲載されて，両者を同時に対比できるという便利さがある．フランス語を少し勉強した者には，うれしい限りである．またこれから新たな語学を学ぶ契機にもなるかもしれない（英語だけが外国語ではありません）．文庫としての制約で一部の作品の収録にとどまっている点が残念だが，代わりに中地による一作品ごとの解説が充実している．また個人的にありがたかったのは，「定型韻文詩のしくみ」，「定型からの脱却」といったコラムがつけ加えられていて，外国語の詩に特有の形式について参考になったことである．

もちろん過去の名訳と比して，日本語がどのように自身の心に訴えるかという問題はある．例えば『地獄の一季節』（1873 年刊）中，次の「錯乱 II　言葉の錬金術」の一節を見よう．以下の印象的な一節は，いつも複数の翻訳を比較するための材料となっている．

Elle est retrouvée!　あれが見つかった！
Quoi? l'Éternité.　何が？　＜永遠＞が．
C'est la mer mêlée　　それは太陽に
Au Soleil.　　混じった海．

後半の 2 行は，宇佐美訳では「太陽と溶けあった　海のことさ」となっている．そちらの方が好みか．ともあれ，太陽が海に沈む光景から「海が太陽に溶け」ていくと主客逆転させ，「永遠」につなげる詩人の感性と表現は，まさに言葉の錬金術と感じる．